

## 2023 年度個人研究報告

田口祐子

研究タイトル：

現代の子どもの人生儀礼のもつ意義について―「お食い初め」から考える―

筆者は、昨年の委託研究（論文集・平成4年度）の論文「子どもに関する人生儀礼の意義と変遷―育児雑誌の記事分析から―」<sup>1</sup>で1960年代後半から続く子育て情報誌『赤ちゃんとうママ』の記事分析を行なった。その中で現在様々な祝い事が行なわれている乳幼児期の儀礼のうち、近年初宮参りとお食い初め<sup>2</sup>に対する親たちの意識が高いという結果を得た。

現在の初宮参りやお食い初めについての人々の実施状況や実施内容について、調査したものは少なく、中でもお食い初めに関する研究はさらに少ない状況にある。またお食い初めに関して親たちが感じている意義について調べた研究は見当たらない。これら2点より、2儀礼のうち「お食い初め」に関する現代における実態と意義について調査することを、本年度の個人研究テーマとした。

そこでまずお食い初めについて、先行研究を収集し儀礼についてまとめられていることを確認することから開始した。お食い初めに関するこれまでの研究の確認作業をしたところ、あらためて先行研究が大変少ないことがわかり、また歴史学や民俗学の分野で集められた各地の調査書においてお食い初めの様子を示す資料は複数みられるものの、これまであまり整理されてこなかった状況を知ることとなった。

以上から、本年度の研究調査内容として、お食い初めに焦点をあて、これまで整理されてこなかったこの儀礼に関する調査資料の収集と整理を実施した。現代における実施状況や意義について論じる前に、各地で古くから行なわれてきたこの儀礼の内容を整理し、ひとりのまとめをすることを中心に据えることとした。

### 1. 家政学や民俗学におけるお食い初めに関する先行研究

一般的に「生後100日か120日目の子に初めて飯を食べさせる祝い事。実際には食べさせるまねだけをする。はしたて。箸ぞめ。ももか。」（『広辞苑』第7版、2018年。「くいぞめ」の項）と定義されるお食い初めについては、これまでどのような研究がなされてきただろうか。

---

<sup>1</sup> 田口祐子「子どもに関する人生儀礼の意義と変遷―育児雑誌の記事分析から―」『論文集（令和4年度）』一般財団法人冠婚葬祭文化振興財団 冠婚葬祭総合研究所、pp.121-135、2023年5月

<sup>2</sup> この儀礼の名称は様々にみられ、未だ整理されていないが、本研究では現代における本儀礼を対象とすることから、昨今メディアでよく用いられている名称を用いることとした。

先述したように、「お食い初め」をテーマとした先行研究は大変少なく、家政学の分野でいくつかみられる程度である。単独で扱われることが少なく、扱われる場合は1歳までの乳児期にみられる儀礼の1つとして他のものと一緒に論じられることがみられる。

単独で書かれた数少ないものの1つに、2016年の宮田佳奈と深井康子による富山県におけるお食い初めと初誕生の儀礼の主に現在の様子を調査したものがある。この中でお食い初めに関しては、平成期に祝った人は全体の87%と高率であった。お食い初めの祝い膳を扱っている地元の仕出し屋によると、「ここ4、5年（2016年時点）で食い初めが行事として話題になってきた」（宮田・深井2017：41）としており、注目され出した時期をうかがい知ることができる。

このほか、日本調理科学会大会研究発表要旨集では2011年から2015年にかけて、「東海三県」「近畿地方」「九州地方」というように地域ごとのお食い初めをはじめとした通過儀礼や年中行事における儀礼食の現状について、多数の調査報告がされている。お食い初めには様々な呼び名があるが、お食い初めの他に、100日目に祝うことが多いことから百日祝い（モモカイワイ）という呼び名を用いることが多く、本発表要旨では、各報告で名称として「百日祝い」を用いて現状を説明する形で統一されている。

家政学における2010年以降のお食い初めを含む儀礼食への注目には、2006年の教育基本法の改正を受けた学習指導要領の改訂による伝統・文化教育の尊重の気運が影響しており、それによって家庭科教育では伝統食や儀礼食について取り上げられることが増えた。また、2013年に「和食」がユネスコ無形文化遺産に登録され、日本人の伝統的な食文化に対する関心が高まったことも背景にあるといえそうだ。

一方、民俗学は各地で庶民の間で行なわれてきた産育儀礼を重要な研究対象としてきたが、お食い初めを主要なテーマとして挙げたものを見つけることは難しい。そういった中で、お食い初めの儀式で、お祝い膳に添えられることの多い「小石」について注目した研究がいくつかみられる。

例えば、丸山久子による「石のおかず」（丸山1978）では、産育儀礼の中で、生児の成長にとまなう幾たびかの祝いの際に、食膳に添えられる石に注目し、この習慣はほぼ全国的にみられるとする。お食い初めのほか、出産前の安産祈願を願う帯祝いや産後すぐの数日にわたる産養いといったことの中でみられ、丸山は総じて見た際に、この石が産神の依代となっているのではないかと仮定している。

また、新谷尚紀による「境界の石—産石と枕石と—」（新谷1984）では産育習俗と葬送習俗に関する儀礼で小石が用いられることを挙げている。そして、特に産育習俗の場合について、様々な資料から子授けや安産祈願、出産当日、3日目、7日目、100日目について石に関する情報を「地域」「いつ」「何の儀礼で」「どうする」「どんな石」「どこから」「あとの処置」「意味づけ」「出典」といった項目を設け、表にして整理している。この表では、100日目、つまりお食い初めに関する部分の分量が最も多くなっており、お食い初めにおける石の位置づけの大きさを感じさせる。表等の整理により、新谷はお食い初めに関しては石に関す

る事例が、生児の膳部に添えられる、食べる真似をさせる、なめさせる、もしくはただ置いておくという程度の差しかなく、民俗としての意味づけもほとんど歯がかたく丈夫になるように、というように、あらゆる面できわめて画一的である点が特徴であるとしている。

新谷は画一的になる理由として、生後 100 日余りの時期というのが生児にとっていわゆる離乳食を摂取し始める時期にあたり、時期の設定が一般的な生理的事実に影響されていることを挙げている。柳田國男の「母乳以外のものも共に生きる用意があることを承認してもらふ」儀礼であったとする言葉が、このことを裏付けているといえる。また、産育をめぐるてみられた石に関する民俗は、このお食い初めをもって完了し、これ以後の段階ではほとんどみられなくなるともしている。

## 2. 歴史学におけるお食い初めに関する先行研究

歴史学分野では、中古（主に平安時代）までの文学作品の記述から、当時の子どもの儀礼の様子を知る試みがなされている。

その中で特に「お食い初め」を取り上げて情報収集するものはみられないが、産育儀礼全般にわたって、子どもの成長期間全体について情報を収集し整理する際に、取り上げられた複数の儀礼の中に含まれることがある。このような形の研究を2つ挙げる。

まず中村義雄による研究（中村 1962）では、王朝文学における記述を整理して幼年期の行事の中で、現在のお食い初めの儀礼とつながりがあると考えられる「五十日（いか）」「百日（ももか）」「魚味始（まなはじめ）」の3つの儀礼を取り上げ、整理している。

「五十日」は生児誕生の後 50 日目に当たる夜、オモユの中に餅を入れて生児に含ませる儀礼であり、その際祝宴を設ける。『源氏物語』『小右記』『山塊記』『宇津保物語』などにおける文字による記録のほか、『源氏物語絵巻』『紫式部日記絵巻』では儀礼の様子の絵も現存する。

『九曆逸文』などから、もと民間の習俗だったものが次第に形式化され貴族階級でも行なわれるようになったことがわかる。それまで乳汁ばかり飲ませて育てていたのを、そうではなくすための風習の形式化したものではないかとの見解を示している。

「百日」は誕生後 100 日目に当たる日に祝いの餅が供され、儀式、その後の祝宴などほとんどすべて五十日と同様であったとしている。五十日と百日の祝いを一緒に行うこともあり、その場合「五十日百日（いかももか）」と呼んだりしたという。このような状態を経て、次第に百日の方に吸収される動きがみられた。

「魚味始」は、「真菜始」「真魚始」とも書き、誕生後 20 か月ほどで、小児に初めて魚鳥の肉など、動物性食品を与える祝儀が行なわれたことをさす。平安から鎌倉期にかけて盛んに行なわれ、文学作品にはあまり記述がみられないという。

実施の時期は五十日や百日に比べて一定せず、生後 20 か月が一応の標準と考えられるが、早いものでは 3 か月という例もあり、11 か月、13 か月、15 か月、19 か月、25 か月など様々である。遅いものでは 3 歳という例もある。

年齢 名称	誕生	3日	5日	7日	9日	50日	100日	20月	3歳	5歳	7歳	10歳	15歳
	着帯												
乳付臍緒切	—												
産着	—	—											
着衣始			—	—									
産剃			—	—	—								
五十日						—	—						
百日							—	—					
魚味始									—	—			
髪垂										—	—		
着袴											—	—	
読書始												—	—
戴餅									—	—			
成年礼	男子												—
	女子												—

図表1：生育儀礼一覧（「ちご」と「わらは」の生活史」の図を元に作成）

次に加藤理による研究（加藤 1994）でも、同様に「五十日」「百日」「魚味始」について、幼児期に行なう儀礼として、主に平安時代の文学作品から記述を集め整理している。図表1に整理されているように、誕生後すぐの数日間に頻繁に儀礼が行なわれるが、それらと3歳になるまでの間の儀礼として、この3つの儀礼を位置付けている。それぞれ中村とほぼ同様の説明となっている。中村が五十日について元民間の習俗だったものが貴族階級でも行なわれるようになったという流れを

紹介しているが、このことについて加藤は「年中行事や祭礼の多くは貴族から庶民に流れ、それに対して生育儀礼の中には庶民から貴族へと広がる流れがみられ、生育儀礼のもつ本質的な意味を示唆している。つまり、親や子供を取り巻く周囲の大人たちが子供の無事の生育を祈念するという、人間の本性に根差したものであるだけに、身分・階級を問わず行うものであり、庶民の親が持つ思いと同じものを貴族の親たちももってこれら儀礼を取り入れることもうなずける」と指摘している。

加藤は「魚味始」は離乳の本格的な開始を祝うことに重点が置かれた儀式であり、新生児が生後何日目を迎えたかを祝う儀式ではなく、その子ども子どもの成長スピードに合わせて行なわれるものであったとしている。子どもが成長し実際に食べる準備が整うことを待って開始される、離乳の本格的な開始を祝うことに重点を置いた儀式であったとしている。参考までに、現代医学でも離乳は5か月目を標準に開始、初期5～6か月、中期7～8か月、後期9～10か月、完了期（1年から1年6か月）と細分され、それぞれの時期でその子ども成長に合わせて進めていくのがよいとされている。

### 3. お食い初めに関する年代別・地域別資料の整理

次に古文書や民俗学の地域調査等の中から、お食い初めに関する資料を集め、整理していくこととする。

#### (1)江戸時代までの古文書にみられるお食い初めに関する資料

『貞丈雑記』は、有職故実の解説書として、有職家伊勢家の所伝を受け継ぎ、考証解説し図解も加え、武家故実の広範な範囲を網羅したものとなっている。伊勢貞丈によって1763年以降記載された雑録を、貞丈没後その弟子が改訂を加えて刊行した。全16巻からなり、内容は第1巻の礼法からはじまり、官位、飲食、刀剣、神仏類などにおよぶ。お食い初めにあたる祝いについては、この第1巻の祝儀の部の中に記述がみられる。まず「いかの祝」として、「子出生して後いかの祝と云う事あり。五十日と書いて「いか」とよむなり。出生の日より五十日めの祝いなり。七夜の祝の如し。」とある。

「喰初の祝」喰初は男女生れたる日よりくりて百廿日に当る日也。月数は五ヶ月にて百廿日とも覚えたる人あり。…此時に能く立つ市場にて、餅五つ買取、五度土器に盛出す。…」（『四条流献方口伝書』）とし、これに続けて3歳で行なう真菜の祝い（または魚味の祝い）の説明をしている。

別に項を設けて説明している「魚味の祝」、魚味（ぎょみ）の祝は、「小児に初めて魚肉を食わしむる事なり。又真菜の祝というも同じ事なり。小児三、四歳の時祝うなり。その日まなとて、小児に食物ヲ供うる祝あり。…小児は脾胃弱き故、粒食・魚肉を喰わしむれば、脾胃すこやかならずして病起る事有。これに依って粒食・魚肉を喰わせざるなり。三・四歳にも至り脾胃も少しかたくなりたる頃、始めて粒食・魚肉をゆるして食わしむるを、魚味と名付けて祝う事なり。」としている。

当時、これらの祝いが実際に行なわれており、その様子を説明したものといえよう。興味深いのは、平安期にみられた百日（モモカ）という名称が全くみられず、生後100日を意識した儀礼は「喰初め」と名称変更されていることである。

他に江戸幕府の右筆であった屋代弘賢が中心となって実施された諸国の風俗習慣の調査をまとめたものに『諸国風俗問状答』がある。これは全国各藩の儒者や知人にて、それぞれの藩における人々の生活習慣、年中行事に関する質問を送り、それについて回答してもらう形をとっている。1813年（文化10）頃各藩あてに逐次送付された。実際の回収率は低かった上に、現存し発見されているものが少ない。現在見ることができるものは20地域近くほどである。

本問状の質問項目は全部で131であるが、そのうち項目111番が「子供の祝ひ、三歳、五歳、七歳など何様の事候哉、又ふかそきといふ事も候哉。」となっており、子どもの祝ひの様子について聞く設問となっている。筆者がみることのできた19地域のうち、11地域でお食い初めに関する記述がみられた（図表2）。そのうち伊勢國、丹波國、紀伊國、淡路國、備後國品治郡、阿波國の6地域には「喰初」という名称がみられ、出羽国秋田領に「箸初」、三河國に「箸揃」、肥後国天草郡に「百日祝」、備後國福山領と備後國沼隈郡に「モモカ」が

みられた。先述の『貞丈雑記』同様、ここでも「喰初」という名称が多く用いられ、平安期にみられた「百日祝」「モモカ」が用いられることは少ない。名称の移りかわりの様子を示しているといえそうだ。ところで、食い初めに関する回答がなかった地域については、当然ながらこの儀礼が行なわれていなかったと言い切ることはできない。ここで確認できるのは、回答があった11地域で「喰初」（もしくは「百日祝」「モモカ」）が行なわれていたということである。

11地域の回答内容を整理すると、回答の多くでこの儀礼が、100日目、110日目、120日目に実施されることが書かれ、場所によっては男児と女児の実施日に10日ほどのずれ（そのような場合男児の方が10日早い）を設けている地域がみられる。またいくつかに、氏神への参拝、膳を準備する、かながしら（金頭）の焼き魚を準備する、食べさせる真似をするなどの説明がみられる。

図表2：『諸国風俗問状答』お食い初め記述一覧

地域	番号	お食い初め関連記載内容
陸奥國白川領	111	なし
出羽國秋田領	111	誕生より、をとはは百日日、女は百廿日をもて、箸初をするよりして、追年の祝ひ、通例に異なることなし。…
常陸國水戸領	111	なし
越後國長岡領	111	なし
北越月令	111	なし
三河國吉田領	110	百日日目に箸揃とて、初て物を食ひ初めさする也。例の親類など請じて、さて児の膳を居へて産婆、児に箸を取ていさゝかくゝめて食はするなり。饗膳の料理等は定りなし。さて後は或は前にも生土神への参詣して守りをもらひ来るなり。此守生涯身に附くる守にて、是より此神をウブ神とも氏神とも云ふなり。猶他の神々へも参ることあり。
伊勢國白子領	110, 111	…百日日始て産神へ詣、喰初、かながしらを焼物に用ふ。又石を皿に入れ膳の向に附て、箸にてはさむ真似して喰むる也。…
大和國高取領	111	がない
若狭國小浜領	111	なし
近江國多羅尾村	111	なし
丹波國峯山領	111	…宮参りと申、産神へ参詣仕、又喰初と申、男子は百二十日目、女子は百日日目に相祝申候。…
備後國福山領	110	…百日日をもゝかと申、宮参仕り、神酒そなへ、小児に膳をすへ初め候。
備後國深津郡本庄村	111	なし
備後國品治郡	111	…七日夕、又は生れ候て十五香とて、ふきの根に甘草を加へ煎じて是をのましめ、男子は女子持ちたる婦の乳をのみ初させ、女子は男子持ちたる婦をたのみ、乳附親と申、乳をのましむ事も7御座候。是等喰初の心にも候らん。…
備後國沼隈郡浦崎村	108, 109, 110	…男子百日日、女子百日日目に百々日と申て、氏神へ参詣いたし申候。…（特に喰初めの言葉はないが、111にも記述なし）
紀伊國和歌山	100	小児産れて百二十日に當る日、喰初とて膳に向はせ祝ひを整ふ。…
淡路國	108, 109, 110	…喰初は大體百廿日を経てる也。其節、金頭と云魚を焼物にして居る所も有。…（111はあるがその中に記述なし）
阿波國	111	…百日日は、喰初とて、赤小豆飯にて祝ひ、飯粒を給初させ申候。…
肥後國天草郡	111	…百日祝する家もあり。なべてはなし。…
		*111番質問内容一子供の祝ひ、三歳、五歳、七歳など何様の事候哉、又ふかそきといふ事も候哉。

## (2)近代以降の民俗調査にみられるお食い初めに関する資料

近代以降にみられる産育に関する調査資料に民俗学分野のものが多くみられる。その中

から3つの調査資料を紹介する。

1つ目として、柳田國男によってまとめられた『産育習俗語彙』(1935年)は、地域に残っている子どもに関する風俗や習慣、儀礼に関する言葉をそれまでの調査報告や論稿などから集めたもので、お食い初めに関しては5ページにわたり全国各地で行なわれている儀礼についてその内容を並べて書いている。例えば、各地に残る「クヒソメ」「ハシゾメ」「ハシゾロエ」「モモカ」などの呼称が挙げられている。このあとに挙げる書より、取り上げている地域にかたよりがみられることから、今回は参考にするにとどめる。しかしこの後に続く同様の産育民俗に関する調査(例えば「日本産育習俗資料集成」など)に大きく影響を与えたと考えられ、本書の位置付けは大きい。

次に、『日本産育習俗資料集成』(1975年)は1937年に全国で集められた産育に関する民俗に関する膨大な量のカードを40年後に整理し出版したものである。柳田國男が立案し、その後を橋浦泰雄、大藤ゆきが引き継ぎ完成させた。「産育を勉強するものにとっては、何度、紐解いても飽きることのない、毎回新鮮な驚きのある資料の宝庫」であるといった研究者もいる(刀根卓代「大藤ゆき著 研究ノート「柳田国男と女の会(女性民俗学研究会)(一)―日本民俗学史の一側面」(『日本民俗学』第208号平成8年11月号)書評)。つまり、長い時間を経て庶民が、「自らの生命と生活とを防衛するために、それぞれの時代に適応して」(はしがきより)形作り、引き継いできたものを、全国から集め、整理したものである。整理方法は、「妊娠」「出産」「育児」と大きく分けた中に、それぞれ「帯祝い」「胞衣」「産見舞い」「名付けと名付け親」「初誕生」「育児に関する禁忌」といった形で細かく49項目に分類している。今回用いたのは「食い初め・初生齒」とした小見出しで分類された部分である。

3つ目として明玄書房から刊行されている全10巻からなる『日本の祝事』シリーズは、巻により刊行時期はことなるものの、おおむね1977年前後に発行されている。このシリーズは、県ごとにその地域を研究のフィールドにしている民俗学者が受け持ち、新たな調査の実施、すでにまとめられている調査の報告書を元に行っている。教育委員会やその地域の古老、その他の研究者の話や意見も入れながら戦前から戦後にかけて担当県の祝い事、主に「誕生」と「結婚」に関する事柄について、その実相と推移についてまとめている。刊行時期から先の『日本産育習俗資料集成』に近いことから、若干であるが、執筆にあたり『日本産育習俗資料集成』を参考文献に入れている県もある。

以上、3つの資料のうち後の2つを元に「お食い初め」に関する記述を整理したのが、別表1・2である。

ここからわかることは、以下のとおりである。

- 全国的に「クイゾメ」の名称が多く用いられている。「モモカ」やそれに関連する名称は中国から九州地方においてみられた。
- 他の時代でみられた「五十」「魚味始」については全くみられず、それぞれについて儀礼として行なうことの必要性が失われ、100日目に行なわれる「クイゾメ」に吸収され

たとも考えられる。お食い初めの意義の変遷を知る上でも、今後さらに情報を集める必要性を感じる。

- 実施時期は 100 日目が全国的にみられ、「100 日」がこの儀礼の重要な要素であるといえる。110 日や 120 日など少しずらした日数もみられるが、これは 100 日を基本にした日数であることが、100 日を元にしながらい日数に男女差をつけたり時期をずらしたりすることから推測できる。また、時期は 100～120 日の間に大方おさまる。
- 内容としては、この日のために茶碗・膳・箸を揃える、赤飯や白飯を 1・2 粒食べさす、あるいは食べ真似をする、尾頭付の魚を膳にすえるということが全国的にみられる。
- 内容を地域別でみるならば、小石を何かしら用いること、それを歯が丈夫になるようにとつなげることは関東から近畿地方にかけてみられる（一部東北や中国・九州にみられることがある）。
- 少ないながら東北限定で長生きをしている高齢者をお祝いに同席させることが行なわれている。

冒頭で挙げた現在の一般的なお食い初めに関する理解（広辞苑）から大きく離れてはおらず、その中でも「クイズメ」とよばれ、100 日という時期の設定、飯を 1・2 粒食べさす（あるいは食べ真似）、尾頭つきの魚も準備する、といったことが共通してみられた。

この他、地域が東京に限定されるが、東京都教育委員会が昭和 52・3 年度に行なった東京都緊急民俗文化財分布調査の報告書（この調査は、1960 年代の高度経済成長を契機に著しく変化した人々の生活について、これまでの形を記録に残すことを目的に、急務として行なわれた）としてまとめられた『東京の民俗』の結果もここに加えておきたい。

東京全域（島嶼部含）でお食い初めについて書かれた記述を探すと、「中央区日本橋」「港区赤坂」「墨田区業平」「板橋区大門」「八王子市上恩方町」「武蔵野市吉祥寺北町」「国分寺市東元町・西元町」「国分寺市東恋ヶ窪・西恋ヶ窪」「日の出町大久野新井」「大島町差木地」の 10 地域にみられる。名称は「オクイズメ」「クイズメ」であり、他の名称はみられない。時期は 100 日頃、飯を食べさせる真似あるいはかませる、膳や尾頭付き鯛を準備するなど、先述の 3 つの資料と同様といえる。

3 つの資料の方に時折みられた、小石や高齢者を同席させるという記述はなかった。

#### 4. まとめ

現代において親たちの意識が高いお食い初めについて、現在の祝いの内容や動向、そして意義について調べることを目的とする中、今年度はお食い初めを取り扱うにあたり、これまでの先行研究の確認とともに、整理されてこなかった複数みられる調査資料の整理を行った。これにより、来年度行なう現在のお食い初めに関する動向と意義の調査をするための土

台作りを行なった。

先行研究では2010年以降、伝統食や儀礼食に関する盛り上がりが見られ、特に家政学分野においてお食い初めに関する研究もみられるようになったが、少数であった。産育儀礼を主要なテーマとする民俗学において、お食い初めを特に取り上げたものがみられない状況があることも今回確認した。ただし儀礼の中で扱われる小石に関する関心は高く、他に小石を用いる儀礼とともに論じられることがみられた。関心の高さ、産育の研究での主要なテーマであった産神と小石をつなげて論じることから考えると考えられる。

先行研究では民俗学よりも歴史学の方で成果がもたらされているといえる。歴史学では、中古以降の文学作品のなかで登場する子どもの儀礼に関する記述を集めて、整理・分析した論稿がみられ、本報告書ではその主要な2論稿を挙げた。2論稿では、幼児期にみられる多くの儀礼を誕生前後から時系列で説明しており、その中の50日、100日等の時期にお食い初めに相当すると考えられる儀礼、「五十日」「百日」「魚味始」が挙げられている。これら3儀礼は、母乳中心の状態から離乳をして通常の食生活に到るようになるための、今でいう離乳食の始まりといった節目に行なわれていたといえる。子どもの成長に伴う生理的な変化に対応したものであることから、広く様々な階層で行なわれていたこと、時期を先に設定した儀礼というよりも、子どもの成長スピードに合わせた儀礼であるとの指摘がみられた。

現在も残るモモカという呼称は生後100日を意味するが、目安として設定されたこの時期よりも、「初めて乳以外のものを食べる」ということの重視から江戸期以降の各地の民俗学調査ではモモカ（百日）よりクイズメ（食べ初め）の呼称が多くなったとも考えられる。江戸時代の武家で100日目のモモカを「喰初めの祝」としていることは、この証左となる。

民俗学における各地の民俗調査におけるお食い初めについては、様々な呼称がみられ、また様々な内容がみられたが、広く共通してみられた呼称は「クイズメ」であり、共通して見られた内容は「生後100日」「膳や箸を揃える」「飯を1・2粒食べさす」であった。小石の民俗、尾頭付きの魚を膳にすえるということについて、より情報を集めることで、このことの持つ意味、またお食い初めに人々が込めた思いがみえてくるのではないかと考えている。

#### ○来年度に向けて

今年度は、これまでまとめた研究がなかった「お食い初め」について、情報収集し、この儀礼の変遷や内容についてわかることを整理し、その中からこの儀礼にみられる特徴をまとめた。

来年度は、これらのまとめを土台にして、現在の状況について、祝った人の話を集め、昨今の儀礼サービスの動向なども確認し、現在のこの儀礼の実態とそのもつ意義についてまとめたいと考えている。

#### 参考文献

- 伊勢貞丈『貞丈雜記』1-4、複製版（ワイド版東洋文庫、校註 島田勇雄）平凡社、2007年
- 恩賜財団母子愛育会編『日本産育習俗資料集成』第一法規出版、1975年
- 加藤理『「ちご」と「わらは」の生活史』慶應通信、1994年
- 新谷尚紀「境界の石―産石と枕石と―」『日本民俗学』156号、1984年、pp.1-47
- 竹内利美・原田伴彦・平山敏治郎『日本庶民生活史料集成 第9巻 風俗』三一書房、1969年
- 東京都教育委員会『東京の民俗』第1～8巻、阿武隈書房、1984-1992年にかけて刊行
- 中村義雄『王朝の風俗と文学 塙選書22』塙書房、1962年
- 日本調理科学会『日本調理科学会大会研究発表要旨集』第23号（2011年）―第27号（2015年）
- 丸山久子「石のおかず」（井之口章次編著『講座 日本の民俗3 人生儀礼』）有精堂出版、1978年、pp.106-119
- 宮田佳奈、深井康子「富山県における初誕生までの儀礼と食べ物 ―昭和前期と平成期を比較して」富山短期大学紀要52号、2017年、pp31-44
- 柳田國男『産育習俗語彙』複製版（国立国会図書館デジタルコレクション）恩賜財団愛育会、1935年
- 『日本の祝事』全10巻、明玄書房、1977-1978年にかけて刊行